学位請求論文審査報告要旨

2011 年 3 月 9 日

申請者　　楊　玲玲（Yeo Leng Leng）
論文題目　Contextual Influences on Chinese Language Learning Strategies Use of High-Ability Students in Singapore

論文審査委員　　糟谷　啓介
イ　ヨンスク
ジョナサン　ルイス

１．　本論文の内容と構成

本論文の目的は、シンガポールにおける英語と中国語によるバイリンガル教育の実態を調査して現状を把握するとともに、そこに見られる問題点を指摘して、将来への指針をあたえることにある。　本論文の構成は次の通りである。

List of Figures and Tables
Acknowledgement
Abstract
Chapter 1: Introduction
1.1 purpose of Study
1.2 Brief Historical Background of Linguistic Situations in Singapore
1.3 Bilingualism and Bilingual Education
1.4 Language Shift and Singapore Chinese Language Education
1.5 Contributions and Significance of the Research Study
Chapter 2: A Discussion on the Literature Review in Language Learning Strategies
2.1 Defining Language Learning Strategies
2.2 Language Learning Strategies: In Cognitive-Psychological Field
2.3 Language Learning Strategies: In the Realm of Culture and Context
2.4 Language Learning Strategies: The Literature in Singapore
2.5 Further Exploration in the Field of Language Learning Strategies
Chapter 3: Research Methodology
3.1 Research Design
3.2 Data Collection Procedures
Chapter 4: Research Findings
4.1 Findings
4.1.1 Questionnaire and Strategy Inventory for Language Learning Design
4.1.2 Translation Task

4.1.3 Interview
Chapter 5: Discussion and Implication
5.1 Contextual Influences on Language Learning Strategies (LLS) Use
5.2 Patterns of LLS Use As Indicated By Qualitative Data
5.3 Limitations of Research Study
5.4 Pedagogical Implications
Chapter 6: Conclusion
Appendices

２，本論文の概要

第一章は論文全体の序論であり、シンガポールにおけるこれまでの言語政策と言語教育の歴史が概観される。シンガポールは 1959 年にイギリスから自治権を獲得した後、1963 年から約 2 年間のマレーシア連邦加入の時期を経て、1965 年に連邦から分離して独立を果たした。シンガポールの言語政策は、主要な三つの民族の言語、すなわち中国語、マレー語、タミル語とそれらの民族を媒介する英語の四言語を公用語として指定し、英語と民族語のバイリンガル教育を基本としている。しかし、英語の地位が上昇するに伴って英語への言語交替が進むと、二つの言語を同等に扱うバイリンガル教育をすべての国民に行うことが困難になった。そこで、1979 年にシンガポール政府は能力別の言語教育を導入し、本来の意味でのバイリンガル教育は成績上位の者だけに限られ、そのための SAP (Special Assistance Plan) School のプログラムが実施されることとなった。本論文がいわゆる“Good Language Learner”を対象にするのは、上記のようなシンガポールの言語教育の背景があるためである。その後も言語教育の仕組みはたびたび改正され、2004 年には新たな中国語教育の新たなプログラムが導入された。そこでは、以前にもましてオーラル･コミュニケーションを重視した言語教育が提唱されている。本論文が取り上げるのは、こうしたシンガポールのバイリンガル教育の実態である。

第二章では、言語学習における「学習方略（Learning Strategy）」の問題が論じられる。学習方略は、言語を学ぶ際に用いる手順や方法、背景となる動機や態度、学習の際にとる具体的行為からなる。シンガポールでは英語の使用率が高まっており、英語を使用する家庭は 1994 年には 36%であったが 2004 年には 50%に増加している。SAP School においても、英語を使用する家庭の子どもが増えてきており、生徒たちはさまざまな学習方略を用いて中国語を学んでいる。著者は先行研究を通じて、学習方略を「認知的（cognitive）」「記憶的（memory）」「補償的（compensation）」「メタ認知的（meta-cognitive）」「情動的（affective）」「社会的（social）」の六つの枠組みに整理している。

第三章では、シンガポールの学校制度のなかでの SAP School の位置づけについての説明がなされた後、本論文でのデータ収集のやり方が説明される。第一は、あらかじめ作成した質問表への回答記入である。質問表は、家庭での言語使用、領域ごとの言語選択、言語技能に対する主観的評価、学習の動機・手段・目的などについての 50 の質問からなる。対象は SAP School に通う 60 名の生徒である。第二は翻訳タスクである。これは 60 名のうちから選抜した 12 名の生徒に、同じ内容の英語と中国語の文章（手紙文）を示し、「英語→中国語」か「中国語→英語」のどちらかの翻訳経路を生徒たちに選ばせた上で、その翻

訳文の正確さを検討するというやり方である。そして第三は、これら二つのデータをふまえて個々の生徒たちに対して具体的なインタビューを行うことである。このインタビューでは、生徒たちの用いる学習方略の内容と特徴が明らかにされる。

第四章では収集したデータの検討がなされる。質問調査によると、「最も身近な言語」として英語を選んだ人数と中国語を選んだ人数は同じであるが、その使用状況はかなり異なる。中国語は祖父母や両親など上の年代に対して使われるが、友人との会話では英語が優位になる。本、雑誌、新聞については、中国語よりも英語のものを選ぶ生徒が多い。言語技能に対する主観的評価においても、生徒たちは中国語よりも英語に自信をもっているという結果が出た。こうして見ると、生徒たちの普段の言語環境においては、相対的に英語が優位になっていることがわかる。この傾向は、翻訳タスクにおいてはっきり現れた。翻訳においては、通常、第二言語から第一言語への翻訳の方が、第一言語から第二言語への翻訳よりも容易であるとされる。最も多かったのは、中国語から英語への翻訳を選んだ生徒である。中国語が第一言語であると答えた生徒のうちの何人かも、英語から中国語ではなく、中国語から英語の翻訳を選んだ。それに対して、英語から中国語の翻訳を選んだ場合でも、翻訳文には英語からの影響が観察された。これらのことは全体として、言語使用における英語の優位性を物語っている。個々の生徒に対するインタビューにおいても、この点は確認された。とくに、中国語の読み書きに関しては、生徒たちはさまざまな手段によって対処していることが判明した。

第五章では、こうした生徒たちの学習方略に影響をあたえる三つの社会的要因が論じられる。第一はシンガポールの教育制度、第二は英語と中国語の社会的地位の相違、第三はシンガポール社会における能力主義である。そして、生徒たちの中国語学習に対する態度のなかに、アイデンティティの要求という文化的動機よりは、試験で高成績を取ることで上位の学校に進学するという道具的な動機づけが見られることは、シンガポールにおける中国語教育の性質が変化していることを示している。

第六章では、これまでの議論が整理されて結論が述べられる。それによると、現在のシンガポールのバイリンガル教育は、本来の意味での「均等バイリンガル」を目指すものではなくなっている。2004 年の政府の教育政策の転換は、中国語学習の負担を軽減するためのものであり、そのことは英語の優位性を暗黙の前提としている。しかし、このことはシンガポールのバイリンガル教育の本来の目的を崩しかねない危険もはらんでいることが指摘される。

３．本論文の成果と問題点

本論文の第一の成果は、具体的な調査を行なうことで、現在のシンガポールにおけるバイリンガル教育の現状とそこで学ぶ生徒たちの言語使用ならびに学習方略の実態を明らかにしたことである。シンガポールの文脈における「母語」は、個人の「第一言語」ではなく、特定の民族＝エスニシティへの文化的帰属を意味する。つまり、英語の使用が拡大するにつれて、民族語はそれぞれの民族の第一言語ではなくなり、あくまで文化的アイデンティティを表示する役割を担うだけの地位にしりぞく一方で、英語が個人の第一言語となりつつある方向を示している。したがって、バイリンガル学校に通う中国系の生徒たちにとって、中国語は民族の出自を示す「母語」ではあっても、一定の学習方略にもとづいて

意図的に学習しなければならない言語になっている。本論文で行われた調査は、こうした実態をはっきりと捉えている。

第二の成果は、バイリンガル学校に通う生徒たちの言語学習の実情を通して、シンガポールの言語状況の変化の断面図を描いたことである。本論文での調査からもわかるように、中国語使用の減少と英語使用の拡大という変化は、年代別の言語使用の差にもっともよく現れている。現在の生徒たちの親の世代は、授業言語が英語に統一された時代に学校に通っていた世代であるため、家庭での言語使用がしだいに中国語から英語へとシフトしていく傾向にある。しかし、だからといって、シンガポール社会が英語の単一言語使用に移行するということではない。本論文の調査からもわかるように、英語が優位になりつつあることは確かだとしても、英語よりも中国語が使われる場面はしっかりと確保されている。個人の言語使用という面でも、社会的な言語領域という面でも、そのことはあてはまる。英語が優位になりつつあることと多言語使用が維持されることは、シンガポールの場合、けっして矛盾しない。本論文はそうしたシンガポールの言語状況の固有性を描くことに成功している。

このように優れた成果をもたらした本論文ではあるが、問題点もいくつか存在する。

まず、データの統計的な処理に問題がある箇所がいくつか見られる。たとえば、翻訳タスクの対象になった調査者の数が限られているため、そこで観察された現象がどれほどの広がりをもつのかが明確でない場合がある。その他にも、統計的にさほど有意であるとはいえない程度の数値の差がことさらに論じられている箇所がある。また、調査者の代表性がどれほど確保されているかも検討すべきであっただろう。

さらに、本論文の対象があくまで SAP School の Good Language Learners にあることは確かだとしても、それ以外の種類の学校との比較がなされていないため、ここで観察された現象が SAP School に特有のものなのか、それとも他の種類の学校とも共通するものなのかが判然としない。そのことは、本論文の結論がシンガポール社会全体にあてはまる一般性をもつのかどうかについて、一定の留保をつけることとなるだろう。

しかし、このような問題点が存在するとはいえ、本論文が優れた研究を成し遂げたことを否定するものではない。本論文の価値は多言語社会シンガポールにおける英語と中国語のバイリンガル教育の実態を明確なかたちで描いていることにあり、ここで示されたデータと考察は他の国のケースに対しても十分に応用可能である。とくに学習ストラテジーに対する社会的・文化的要因の重要性を示した点で、本論文は大きな学術的価値をもつものである。

４．結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終試験結果の要旨

平成 23 年 3 月 9 日

論文審査担当者
糟谷　啓介
イ　ヨンスク
ジョナサン　ルイス

平成 23 年 2 月 7 日、学位請求論文提出者 楊 玲玲 氏の論文「Contextual Influences on Chinese Language Learning Strategies Use of High-Ability Students in Singapore」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、楊 玲玲 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、楊 玲玲 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。